# 機密法廷

小説国家機密法

静岡県弁護士会
編著

編著者©
静岡県弁護士会
中村 光央　浅野 正久
荒巻 郁雄　大澤 恒夫
小倉 博　白井 孝一
冨山 喜久雄　増本 雅敏

機密法廷——小説・国家機密法

1989年10月25日　初版第1刷発行

発行者　柳沢明朗
発行所　㈱労働旬報社
東京都文京区目白台2—14—13　〒112
電話（03）943—9911（代表）
振替　東京0—180374
印刷所　㈱東銀座印刷出版
製本所　㈲坂本製本
デザイン　河田純

定価はカバーに表示してあります。

# 機密法廷

小説「国家機密法」

静岡県弁護士会＝編著

労働旬報社

プロローグ　5
第一章　高揚　11
第二章　逮捕　23
第三章　展開　45
第四章　法廷　81
一　開廷　81
二　調書　92
三　起訴状認否・冒頭陳述　102
四　証人尋問　116
五　被告人質問　134
六　最終弁論、そして判決　147
もう一度プロローグ――エピローグにかえて　155

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あとがき　161
参考／スパイ防止法案　175

# プロローグ

**一九九×年八月七日、ＮＨＫニュース**

「……今日の東京外国為替市場は、大韓航空機爆破事件にともなう朝鮮半島の緊張を受けて、ドルが急騰し、一時一ドル一〇五円三四銭となりました。しかし、午後になって日銀が介入し、一ドル九九円台にまで戻しましたが、外国企業の円売り・ドル買いはつづき、今日の終値は、一ドル一〇四円八七銭でひけました」

「次のニュースです。国会は、来週からの夏季休会を前に、参議院の法務委員会で、いわゆるスパイ防止法、『防衛秘密を外国に通報する行為等の防止に関する法律案』を自民党の単独多数により可決し、参議院本会議へ送りました。同法案に対しては、野党はもとより日弁連、日本弁護士連合会の強い反対がありましたが、休会明けの参議院本会議で可決成立の運びとなりました。これにより、いわゆるスパイ行為に対しては、無期懲役をふく

む重罰が科せられることとなりました」

**横浜市伊勢佐木町裏の「赤ちょうちん」**

河野正義にとって、今日は特別の日といってよかった。たまたまフラスコを丁寧に洗浄していなかったために、新素材が予想もしなかった反応をおこして沈澱を生じ、新たな化合物を創り出したのだ。このときには正直いって、フラスコをよく洗わなかった助手の山下をどやしつけたい気分だったのだが、その沈澱を分析してみると、こいつが文字どおり「予想外の」性質を有していることが明らかとなったのである。

たいがいの化学繊維は二〇〇度の熱を加えた場合、膨張し組織変化をおこすものであるが、このクソッたれは、不感症のごとくなんらの変化もおこさなかった。そこで、冗談ぽく一気に四五〇度に加熱してみても、このクソッたれは溶解すらしなかった。それではと、氷点下一五〇度のなかに放り込んでも、この不感症は、収縮すらしなかった。こうなると、なにはともあれ、この怪体な代物を固定しなければならない。

山下のやつに、フラスコに着いた不純物を調査させ、これが、新素材とどのように化合して沈澱を引き起こすのかを突き止めるのに、この日一日を費やした実験の時間以上の時

間を費やさなくてはならなかった。その結果、河野は、「驚異の」新素材を創り上げたのである。

気がついたら、終電の時間はとっくにすぎていた。

研究室に泊まったとしてもなんの問題もなかったが、河野としては、なにはともあれ一杯やらないわけにはいかなかった。それで、「赤ちょうちん」に来たというわけである。

店は、いつものように明日の仕事のことなどなんら考えていないようなやつらでごった返していた。数日前、河野が来たときには、河野自身が同じ人種だった。しかし、今日はちがう。

「おまえら、ノーベル化学賞候補と一緒に飲んでるんだぞ。いつかテレビを見て驚くな！」と、つい叫びだしそうになるのを、河野は辛うじてこらえた。

隣で飲んでいた五〇代半ばくらいの男が、「なぁ若いの、スパイを捕まえる法律はいかんのかね。おらぁそう思わねぇ。スパイなんざぁ、国を滅ぼす元だ。どんどん死刑にしなくちゃぁな。なのに今度の法律には、死刑はないんだとよ」と酒臭い息を吐いた。

河野は、もっともだと思った。国を滅ぼすか否かはともかくも、スパイというやつは、幸運の女神を、かすめとってしまう悪魔にちがいなかった。

（あのクソッたれは、誰にも渡すわけにはいかない！）

**日弁連事務局**

山本百合には、今日の大岩事務総長は、別人であった。いつもは、冗談をいいつつ、慣れるまでは苦痛でしかなかったが、速射砲のように「達筆の」原稿を手渡してくれるのに――事務局では〝八ドットの人間ワープロ〟と呼ばれていた――、今日はさっぱりだった。

大岩は、一〇年前煙草をやめたというが、日弁連事務総長になってからふたたび煙草に手を出し、その本数は日を追って増えつつあった。それにしても今日は、かつて禁煙していた人とは思えないほどであった。

大岩が、百合に手渡してくれた原稿は、いつもよりはるかに達筆であった。それは、会長の藤村敏雄が読む「声明」の草案であった。

**東京日比谷公園**

藤村敏雄は、かつて選挙権を十分に行使しなかったことを反省していた。

選挙というやつはなぜか日曜日におこなわれるのだが、若いころの藤村は、日曜日には

再審事件の現地調査に出かけたり、公害訴訟の被害者集会で報告したりしていて、選挙権を行使すべき住民登録地である自宅周辺にいたためしがなかった。

四〇歳を越えてからは、日曜日に自宅にいることも多くなったが、たまに投票所に出かけても、誰に投票してよいかわからず白紙を箱に入れるだけであった。ただ唯一の例外は、最高裁の判事の名前の上に×をつけることであったが……

（結局おれは、選挙というものを信用していなかったんだな、その結末がこのザマだ）

藤村は、彼が信用していなかった政治家につづいて壇上に立った。日比谷公園は、たしかに多くの人々で埋まっていたが、数年前の同じ趣旨の大会で見たときよりは、心もち少ないような気がした。

**平成×年九月二二日「官報」**

「防衛秘密を外国に通報する行為等の防止に関する法律」は、平成×年法律第二一三号として公布された。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 第一章　高　揚

河野は、落ち着かなかった。

あの日、助手の山下のミスからはじまった新素材の騒ぎも一段落して、クソッたれがICUという名前をもらい、いままでなんの仕事もしていなかったと思えた営業の連中が、日米レーヨンやら防衛庁から多くの受注を得てきて、それにともなって給料がウソみたいに跳ね上がったことは嬉しかったし、いままでこの会社にもあるのだということを対外的に言い訳するためだけに存在していたかのごとき研究開発室が、多くの予算を獲得して会社のなかのヒーロー的存在となったことも嬉しかった。

しかし、最近、いくら電話しても美津子が会おうとすらしないことが、河野を落ち込ま

せていた。しかも、美津子が思いもかけぬことをいい出したのである。
「私、近くお見合いするの」
河野は、やっとの思いで、相手が美津子の父親の会社の重要取引先である大野工業の社長のひとり息子、大野健一であることを聞き出し、見合いの前になんとか会ってくれるよう約束をとりつけた。
その約束の日が今日である。しかし、河野は、何を話していいのかわからなかった。前夜はほとんど一睡もせず、あれもいおう、これもいおうと考えていたが、結局、美津子にとって俺は魅力のない男なのではないかとの結論に達してしまい、そうなると、何を話したって無駄ではないかと思えてきた。

約束の店は、河野と美津子が初めてデートした場所である。あの日、店は満員だった。その後、店の応対が変わったというわけでもないのに、だんだんと客が離れていった。今日も、広くない店のなかの客はまばらだった。
「ゴメンナサイ、遅れちゃって」
この台詞を、河野は、何回聞いたことだろう。

友だちのなかにはしたり顔で、たまにはわざと遅れていくのも女の子の気をひく作戦だぞ、と教えてくれるやつもいたが、性分なのか、河野は約束の時間の一五分前に着くのがつねだった。この日は、三〇分以上も前に着いてしまった。

服装には全く無頓着な河野にとって、最近美津子が着て来る大人っぽい服装はいったいなんなのか、全然わからないけれども、この日の美津子の服装は、やけに華やいだ大人の色気を感じさせるものだった。こういう趣味は大野健一の好みかと思うと、河野はいたたまれない気持ちがした。

「いや、そんなに待たなかったよ」

これもおなじみの台詞だった。

席につくなり美津子は硬い表情で、いましがた見合いをしてきたばかりだといった。重い沈黙が二人を支配した。

それからどれくらいの時間が経ったろう。河野には凍りついた長い時間のように思われた。

沈黙を破った美津子の口から、親のためにしかたないというような言葉が出てきたのは信じられなかった。そんな言葉を聞かされるくらいなら、「あなたなんか嫌いよ」とひと

思いにいわれたほうがどれくらい気が楽か知れなかった。
「父や母は、丈夫なほうじゃないし、これから先、あなたに世話になると思うと辛いの。それに、こんなことといっても怒っちゃダメよ。父も母も、あなたは安月給のサラリーマンで、将来が心配だっていうの。それにくらべれば健一さんは、いろいろ問題のある人だけれど、なんてったって、上場企業の社長のひとり息子だし、父の会社は、健一さんの会社の下請けだし、そんなことを考えると、私も好き勝手なことをいえないのよ」
（これは、美津子の本心だろうか？　それなら……）
「君は、そんなことで好きでもない男の妻になろうというのか。君らしくないよ」
「でも……」
うなだれる美津子に、河野は言葉をつづけた。
「いいから聞いてくれ。君の、あるいは君の両親の心配というのは、ぼくがうだつの上がらない男で、将来に不安があるということだけなんだろう？　たしかにいままではそうだったよ。でも、これからはちがうんだ。いままで安月給で我慢しながら研究に打ち込んできたんだけれども、最近やっとすごい製品の開発に成功したんだ。ＩＣＵといってね、耐熱、耐寒性、伸縮性に極めて優れた繊維なんだよ」

「それがどうしたの？」

「まぁ聞いてくれ。たしかにこの繊維は、民間で使うなら、せいぜいスキーウェアぐらいにしか使えないよ。でも、軍需関係では画期的な製品なんだ。軍服に使えば、熱帯のジャングルでも、砂漠でも、極寒の極地でも機動性に優れたものになるし、戦車や飛行機などの非金属部分に使えば、いままでをはるかに上回る性能を引き出すことができるんだよ」

美津子には、それがどういう意味をもっているのか、まだわからなかった。

「これは、会社でもほんの一部の者にしか知られていないんだけれど、すでに陸上自衛隊の新しい制服に採用されたし、大手の日米レーヨンからも引き合いが来ているんだ。それに……」

「どうしたの？」

「これは、トップシークレットだから……」

「誰にもいわないわ」

「実は、アメリカ軍からも引き合いがあるんだよ。少し前の大韓航空機爆破事件で朝鮮半島が緊張してるだろう。在韓米軍が将来に備えて、耐寒性に優れたｉＣＵをほしがっているんだ。おそらく来週にも、大量の受注が決まる運びなんだ」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com